

〈ドイツにおける経済スパイ活動の現状と対策(1)〉

2021年に摘発された 4つのスパイ事件

帝京大学助教

久保田 隆



アウクスブルク市庁舎(筆者撮影)

はじめに

昨今の米中対立を背景として、先進諸国では先端科学技術の国外流出防止が経済安全保障上の大きな課題となっている。企業や大学などが有する先端技術が外国に流出することによって、個々の企業や大学が損失をこうむるだけでなく、日本経済全体の競争力が低下することも危惧される。さらに、その技術が軍事転用可能な技術、いわゆるデュアルユース技術(軍民両用技術)であった場合には、ひとたび外国に流出すれば、日本の安全保障

にとって直接的な脅威となりうるため、より厳格な管理・保護体制を要する。

先端科学技術の流出には、合法な手段による場合と非合法な手段による場合がある^(*)。前者の例としては、大量破壊兵器やその製造手段となりうる技術や製品の輸出管理の問題がある。日本では、1987年に発生した東芝機械事件を受けて、輸出管理体制が強化されるに至った。また、直近の例として、2022年5月11日に成立した経済安全保障推進法において、第四の柱として特許の非公開が盛り込まれたことも注目される。特許出願から一定の期間が過ぎ、発明が公開されれば、非合法な手

段を用いずともその発明内容を知ることができる。したがって、これもまた、合法な手段による技術流出への対策の1つとして位置づけることが可能であろう。ほかに、通常の経済活動や人の移動(特に留学生や研究者の移動)、投資といった合法的な活動を通じた技術移転にも対策が講じられている。

これに対して、本連載で扱う経済スパイ活動は、非合法な手段による技術流出の最たる例だといえる^(*)。2020年1月にソフトバンクの元社員が逮捕された、いわゆるソフトバンク機密漏洩事件では、元社員が在日ロシア通商代表部の外交官にそのかされ、金銭を得るのと引き換えに、同社の機密情報を漏洩したとされる。元社員には、2020年7月9日、不正競争防止法違反の罪で有罪判決(懲役2年・執行猶予4年、罰金刑80万円)が言い渡された一方で、機密漏洩をそのかしたロシア外交官は、同罪の教唆の疑いで書類送検されるも、捜査当局の出頭要請に応じないまま本国に帰国したのであった。

欧州随一の技術大国であるドイツにおいても、現在、経済スパイ活動をはじめとする、外国情報機関員によるスパイ活動が大きな問題となっている。ドイツの対内情

報機関である連邦憲法擁護庁(BfV)の長官、トーマス・ハルデンヴァングは、2022年5月19日に開催された第18回連邦憲法擁護庁シンポジウムにおける講演の中で、「今日、ドイツに対するスパイ活動は、少なくとも冷戦期と同水準にまで達しているとみられる——もしそうでないとするれば、明らかにそれ以上だ」と述べている^(*)。

ドイツにとって特に大きな脅威となっているのが、ロシアによるスパイ活動である。2021年6月初旬に「Focus」誌が報じたところによれば、ロシアの情報機関の工作員が200名ほどドイツに送り込まれているとされる(その後、ロシアによるウクライナ侵攻を受けて40名の外交官を追放。その中に何名の情報機関員が含まれていたのかは不明)。それらの工作員は、主として外交官の身分で、在ベルリン・ロシア大使館のほか、在ハンプルク・ライプツィヒ・フランクフルト・ミュンヘンの各総領事館を拠点として、政治・経済・軍事・メディアの関係者に対して重点的に働きかけを行い、機密情報の獲得を試みているとのことである。BfVの高官も、ある取材に対し、ロシアのスパイは高度な実践的訓練を受けており、ドイツの治安当局の監視の目を巧みに逃れている旨述べている^(*)。仮にスパイ事件が認知され、

被疑者を特定できたとしても、外交官の身分を有する者は、国際法上、不逮捕特権を有するため、接受国（受入国）たるドイツの当局は身柄を拘束することができず、ベルソナ・ノングラータ（好ましからざる人物）として国外退去させることしかできない。

連載第1回となる本稿では、ドイツでスパイ事件の捜査を担当する連邦検察庁（G B A）のプレスリリースや各種報道を参照しながら、2021年に摘発された4つのスパイ事件について紹介する^(※5)。

(※1) 齊藤孝祐「先端技術情報の管理をめぐる課題」『治安フォーラム』27巻12号（2021年）38頁以下参照。

(※2) 本連載では、ドイツで一般的な用語法にならない、外国情報機関が情報の窃取等に関するケースを「経済スパイ」^(※3)、もっぱら競合企業間において行われる行為を「産業スパイ」^(※4)と称する。

(※3) Statement von BfV-Präsident Thomas Haldenwang auf dem 18. Symposium des Bundesamtes für Verfassungsschutz am 19. Mai 2022 in Berlin. <<https://www.verfassungsschutz.de/SharedDocs/reden/DE/2022/2022-05-19-haldenwang-symposium.html>>.

(※4) Josef Hufeischiute, Als Diplomaten getarnt: Russland schickt 200 Geheimagenten nach Deutschland. FOCUS ONLINE v. 4. 6. 2021. <<https://www.focus.de/politik/deutschland/einsatz-fuer-den-keiml-russland-verstaerkt-splionage-in-deutschland-200->

電子機器類の保守点検を担当していたことから、連邦議会の建物の平面図を入手することができた。委託業者への平面図の提供それ自体は、業者が所定の作業を行えるようにするためであり、合法であった。Fはこれを利用して、遅くとも2017年9月初め頃、みずからすすんでロシアの情報機関に対して情報を提供することを決意し、平面図のPDFデータをCD-ROMに保存したうえで、ロシアの軍事諜報機関GRU所属とみられる在ベルリン・ロシア大使館の軍事アタッシェ（駐在武官）に送付した。

Fが捜査線上に浮かんできたのは、連邦刑事警察庁（B K A）が連邦議会の管理部門を捜査していたところ、平面図のPDFファイルがFの勤務先の会社宛に送信されていることを突き止めたからであった。ドイツ当局は、同年にはすでに捜査を開始し、2019年にはFの勤め先の会社や自宅の捜査を行った。そして、2021年10月28日、ベルリン高裁にて、Fに対して2年の拘禁刑（執行猶予付き）が言い渡されたのであった。

報道によれば、Fは、旧東独（DDR）の国家人民軍の元将校であっただけでなく、1984年から1990年にかけて、国家保安省（M f S、いわゆるシユター

geheimagenten-1m-verdecken-einsatz_id_13361366.html).

(※5) これらの事件については、拙稿「2021年にドイツ連邦検察庁が摘発した2つのスパイ事件」『東京大学先端科学技術研究センター経済安全保障研究』プログラムReport Vol.3（2021年）<http://ip.rocast.u-tokyo.ac.jp/esrp/wp-content/uploads/2021/08/20210730_Report_Vol3.pdf>. 同「ドイツで活発化するロシアのスパイ活動」『東京大学先端科学技術研究センター経済安全保障研究』プログラムReport Vol.5（2021年）<https://ip.rocast.u-tokyo.ac.jp/esrp/wp-content/uploads/2021/10/20210922_Report_Vol5.pdf>. 参照。

ドイツ連邦議会平面図漏洩事件

2021年2月12日、ドイツ連邦検察庁は、首都ベルリンの中心部に位置する連邦議会の建物の平面図をロシアの情報機関員に提供した疑いで、ドイツ国籍のF氏（55・当時）をベルリン高裁に起訴した。罪名は、「諜報機関の工作員活動罪」であった（ドイツ刑法99条1項1号。以下、「諜報活動罪」と略称^(※6)）。同庁の2021年2月25日付のプレスリリースと各種報道によれば、事件の概要は次のとおりである。

メンテナンス業者の社員であったFは、連邦議会内の（ジ）の非公式協力者（IM）でもあったとされる。もっとも、今般発覚した事件以前には、ロシアとの接点はなかったようである。犯行の動機について、報道では、Fは金に困ってロシアの諜報機関とのコンタクトを図ったものとされているが、それ以上は明らかにされていない^(※7)。

(※6) 諜報活動罪の規定の邦訳は、拙稿「WIRKSOM——ドイツの経済・産業スパイ研究プロジェクト」『東京大学先端科学技術研究センター経済安全保障研究』プログラムReport Vol.2（2021年）<http://ip.rocast.u-tokyo.ac.jp/esrp/wp-content/uploads/2021/07/20210701_Report_Vol2_rev.pdf>の頁を参照。

(※7) Spionage für Russland - Angekletter war Strahl-IM, WELT v. 25. 2. 2021. <<https://www.welt.de/politik/deutschland/article227057089/Deutscher-weggen-Splionage-fuer-Russlands-Geheimdienst-angekletter.html>>.

ロシア人研究員スパイ事件

ドイツ連邦検察庁は2021年6月21日、アウクスブルク大学所属のロシア人研究員・N氏（29・当時）を諜報活動罪の疑いで逮捕・勾留したことを明らかにした。

Nは、同大学のメカニカル・エンジニアリング研究室にて学術助手として勤務しながら、素材の軽量化に必要なハイブリッド材料について研究していた。同研究室は、企業への協力も行っていた。連邦検察庁のプレスリリースによれば、Nは、2020年10月初旬以降に少なくとも3回、在ミュンヘン・ロシア連邦総領事館に勤務するロシアの対外情報機関・SVRの職員に会っており、そのうちの少なくとも2回は、現金と引き換えに、大学内で得た情報を提供したとされている。

ミュンヘン高裁で行われた裁判においてNは、「私は工作員ではない」と供述し、事実を否認した。Nは、公開情報をロシア総領事館の職員に提供したことは認められたものの、職員が従事していた活動については何も知らなかったと主張した。しかし、裁判では、会合を重ねるうちに「情報機関員ではないか」との疑いを抱いたことが認定され、2022年4月13日、Nに対して1年の拘禁刑（執行猶予付き）を言い渡した。

この事件について、ドイツ南西部の街・フライブルクにあるマックス・プランク犯罪・安全・法研究研究所にて経済スパイ・産業スパイ研究プロジェクト「WISK OS」を主導したミヒャエル・キルヒリング上席研究員

L博士二重スパイ事件

2021年7月6日、ドイツ連邦検察庁（GBA）は、政治学者のL博士（75・当時）を逮捕したことを発表した。その前日、滞在先のイタリアから帰宅したLは、家の前で待ち構えていた警察によって逮捕された（翌6日、勾留は不要とされ釈放）。報道によれば、Lは長年、ドイツの対外情報機関である連邦情報局（BND）の情報提供者として活動していたが、実は、その裏で、中国の情報当局に対しても情報を提供していた、いわゆる二重スパイであった。

連邦検察庁は、以前からLに目をつけており、諜報活動の嫌疑で捜査を進めていた。2019年11月23日、捜査官がLの自宅を訪れ、捜索令状を提示したとき、Lとその妻・Kは、ミュンヘン空港に向けてまさに出立するところであった。ドイツ公共放送連盟（ARD）によると、夫妻は、Lの指導・監督を担当する中国の情報機関員らと面会するべく、ミュンヘンからマカオへと向かおうとしていたのだという。捜査官は、Lの自宅を徹底的に調べあげ、旅行鞆を捜索し、多数の記録媒体と

は、Nの逮捕直後に行われた学生向け雑誌のインタビューにおいて、次のように述べている。「本件は、意思と認識を有する内部犯による犯行であるが、これはどちらかといえば例外的である。本事件は、本格的な諜報活動に先立って、標的にあたりをつけるために行われるスパイ行為を少しばかり想起させる」。さらに、同氏は、「なぜ大学が狙われるのか」という問いに対し、「外国の諜報機関は、商業的な成功の見込みがあるものすべてに関心をもっている。そして、それらの機関は、特に、潜在的に軍事的利益があるものに焦点を絞っている。想像するに、アウクスブルクの事件もそうだったのではない。容疑者が従事していた研究は、航空機や自動車の製造にも関係するものであり、こういった研究に外国の軍は常に関心があるものだ」と答えている。

(※a) Russischer Wissenschaftler wegen Spionage verurteilt. Süddeutsche Zeitung v. 13. 4. 2022. <https://www.sueddeutsche.de/bayern/augsburger-universitaet-spion-urteil-1.5566125>.
(※b) ZEIT Campus v. 26. 6. 2021. <https://www.zeit.de/campus/2021-06/russischer-geheimdienst-spionage-verdacht-universitaet-augsburg>.

パソコンを押収した。そして、2021年5月20日、夫妻を在宅起訴したのであった。

その後、2022年4月29日、夫妻に対しそれぞれ2年（L）と1年6月（K）の拘禁刑が宣告されたことが発表された（いずれも執行猶予付き）。判決自体は、前年の12月に言い渡されたものであるとされていることから、その4か月後によく公表されたことになる。判決では、さらに、中国側から得た利益に相当する6万ユーロの没収も言い渡されている。

政治学者のLとは、いったいどのような人物だったのだろうか。Lは長年、CSU（キリスト教社会同盟）と関係の深いハンス・ザイアール財団の職員であると同時に、連邦情報局のインフォーマント（情報提供者）でもあった。Lは、50年以上もの間、ドイツの対外情報機関である連邦情報局（BND）の指示のもと動いていたのである。また、最近までBNDの本部があったミュンヘン近郊の街・ブラッハに出入りしており（2019年2月にベルリンに移転）、BNDの上層部とのコネクションも有していたとされる。ARDの報道では、「どうやらBNDは、Lがキャリアを築く過程で得た仕事上の交友関係に大きな価値を見出していたようである」とも

評されている。

ARDによると、Lは、1980年代のはじめに、CSUに近い関係にあるハンス・ザイデル財団に職を得て以来、客員講師などの身分で、数々の国外出張の機会を得、旧ソ連・ロシアやバルカン半島、南アフリカ、南アジアなどに滞在していたようである（そのうちの一部分は、比較的長期にわたるものであった）。同財団で定年を迎えた際、Lは、国際安全保障政策部門の長を務めていた。定年後、Lは、自身が設立したシンクタンクである「越境学研究所」の所長に就任し、ミュンヘン近郊のランツフートにある自宅とイタリアの南チロル地方にあるセミナールーム付きの邸宅を歩き来しながら研究所を運営していたとされる（事件後に閉鎖したとみられる）。

BNDと越境学研究所との間でも、海外からゲストを招いて行われた講演会などにBNDの職員が同席するといった形で、交流が続いていたようである。BNDは、この研究所がBNDの出先機関であるかどうかについては、また、LがBNDとどのような関係を有していたのかについても回答せず、その業務内容に関する質問については「立場を明らかにしない」と述べている。

英国大使館現地職員スパイ事件

2021年8月10日、在ベルリン・英国大使館に現地職員として勤務する英国籍のS氏（57・当時）が、諜報活動の疑いで逮捕された。同氏は、遅くとも2020年11月より、ロシアの情報機関員に対し、訪問者のリストなどの書類を提供していたほか、少なくとも1回は、ドイツ外務省の職員に関する情報提供も行ったという。ほかにも、テロの抑止に関する文書が含まれていたとも報じられている（いずれの国におけるテロ計画かは不明）。

逮捕の翌日に開かれた記者会見において、ドイツ外務省の報道官は、「ドイツと密接な関係にある同盟国（英国）に対する諜報活動がドイツの地において行われたことは、とうてい受け入れがたい」と語った。その一方で、「ドイツ当局は、そのロシア情報機関員を特定したのか？ その人物は、ベルリンのロシア大使館の職員なのか？」といった記者の質問に対しては、一般の諜報活動がロシアの情報機関からの依頼で行われたという情報を「非常に深刻に」受け止めている、と述べるにとどま

連邦検察庁の発表によると、Lが中国の情報機関と接点をもったのは、定年間近の2010年6月、同済大学で講演をするために上海に滞在したときであったという。Lは、捜査官に対し、中国の情報機関員から勧誘を受けた際、BNDに報告したと語っている。BNDは、それを受けて、Lに対し、誘いに乗るよう背中を押したという。中国側は当初、Lを、ミュンヘンに拠点を置く世界ウィグル会議に送り込もうとしていたが、Lはそれには応じなかったとも報じられている。

中国側の情報機関員は、Lに対して、暗号化された情報伝達のための技術支援を行っていたとされている。一方、Lが中国側に何を提供していたのかは不明である。また、中国の情報機関がLとBNDとのつながりについて把握していたのかどうか、明らかにされていない。

(※10) Michael Götschenberg, Spionierte ein BND-Informant für China?, tagesschau v. 6. 7. 2021, <https://www.tagesschau.de/investigativ/bnd-spion-china-103.html>.

(※11) Spionage für China - Ehepaar verurteilt, Der Spiegel 18/2022, S. 10.

つた。

「『シュピーゲル』誌の報道によれば、Sの逮捕は、ドイツ当局と英国当局の共同作戦の成果だったという。Sの犯行が発覚するきっかけとなったのは、同氏の銀行口座とクレジットカードの使用履歴であった。捜査員は、Sが比較的長期にわたって、口座から現金を引き出すことも、クレジットカードを使用することもなかったことから、日常的な金銭のやりとりをすべてロシアの情報機関から受け取った現金で済ませているのではないかと推論したのである。

その後、2022年4月4日、Sの身柄が英国に引き渡されたことが報じられ、裁判が英国本国で行われることが明らかにされた。

(※12) 諜報活動罪(99条)を含むドイツ刑法第2章「反逆及び対外的安全の危殆化」に規定される犯罪類型の多くは、NATO部隊保護法(NTSG)にもとづいて、一定の要件のもと、ドイツだけでなくNATO同盟国に対して行われた行為にも適用されるため、本件のように英国に対して行われたスパイ活動の取締りにも用いられる。

(※13) Mitarbeiter der britischen Botschaft leakte off enbar Antiterror-Daten: Mutmaßlicher Putin-Spion in Potsdam verhaftet, FOCUS Online v. 11. 8. 2021, <https://www.focus.de/politik/deutschland/sofi-russland-

dokumente-verschafft-haben-mutmasslicher-auslaendischer-agentin-potsdam-festgenommen_id_13677863.html).

(※14) Marcel Fürstenau, Berlin, die ewige Hauptstadt der Spione, DW v. 13. 8. 2021, <https://www.dw.com/de/berlin-die-ewige-hauptstadt-der-spione/a-589852035>.

(※15) Alles in bar, Der Spiegel 39/2021, S. 9.

(※16) Fidelius Schmid, Berlin liefert mutmaßlichen Agenten an Großbritannien aus, Der Spiegel v. 4. 4. 2022, <https://www.spiegel.de/politik/spionage-berlin-liefert-mutmasslichen-russen-agenten-david-s-an-großbritannien-aus-a-ec804f4b-d84a-4152-9c3a-245259e54ce8>.

おわりに

本稿では、2021年にドイツ当局によって摘発された4つのスパイ事件について紹介した。これらのうち、先端科学技術を標的とする経済スパイ事件として位置づけられるのは、厳密には2番目に紹介したロシア人研究員スパイ事件だけである。しかし、冒頭で述べたように、とりわけロシアが200名近くの情報機関員をドイツに送り込んでいるという事実には照らせば、これらの事

件は氷山の一角にすぎないと考えるのが自然であろう。その中に、企業や大学を標的とした経済スパイ事件が少なからず含まれていても、なんら不思議はないと思われる。

本稿で紹介した4つのスパイ事件に関して注目されるのは、いずれの事件においても、外国の情報機関員に協力した人物が、ドイツ刑法99条の「諜報機関の工作員活動罪」(諜報活動罪)にもとづいて摘発されている点である。同条の特徴としては、その対象が営業秘密や国家秘密に限定されていないこと、外国の諜報機関の活動の一環として行われることが必要であること(ただし、行為者がその諜報機関に所属していることまでは不要)、情報管理者などの対象者への接触の段階で成立すること、ドイツ国外から行われたサイバースパイ活動にも適用可能であることなどが挙げられる。日本の刑法にはドイツの諜報活動罪に相当する犯罪類型が存在しないため、参照価値が高い規定であるといえる。

本連載では、次回以降もこの諜報活動罪の規定を手がかりとして、ドイツにおける経済スパイ活動の現状と対策について探っていくこととしたい。

地政学の見方を知る(3)・完

マッキンダーから現代まで

国際地政学研究所 上席研究員

奥山 真司



前回(6月号)は帝国主義の伝統からアメリカにマハソンという海軍拡大論者が出てきたことまでを紹介してきた。

これまでの地政学の流れは、ドイツでの地理学の発展を一つの柱として、アメリカの領土拡大を横に見ながら、主に列強国のエリートたちの間で、植民地争いを背景とした世界戦略やグローバルな視点に対する要求により醸成されてきたと言える。

そして最終回となる今回は、まずは現代につらなる(古典)地政学の基礎を20世紀初頭にまとめたハルフォード・マッキンダーと、それをアメリカに適用して現代

の大戦略論に大きな示唆を与えたニコラス・スパイクマンを紹介しつつ、地政学の見方が戦後に大国らのいわゆる「大戦略」の議論に受け継がれて現代にも使われている様子を描きつつまとめる。

また、最後に地政学全般に対する強烈的な批判に対して「地政学の見方」は生き残ることを述べてまとめてみたい。

マッキンダーと「ハートランド論」